

台川

宮沢賢治

青空文庫

「もうでかけましょう。」たしかに光がうごいてみんな立ちあがる。腰をおろしたみじかい草。かげろうか何かゆれている。かげろうじやない。網膜が感じただけのその光だ。「さあでかけましょう。行きたい人だけ。」まだ来ないものは仕方ない。さつきからもう二十分も待ったんだ。もつともこのみちばたの青いいろの寄宿舎はゆっくりして爽かだよかつたが。

これからまたここへ一遍帰って十一時には向うの宿へつかなければいけないんだ。「何処さ行くのす。」そうだ、釜淵まで行くというのを知らないものもあるんだな。「釜淵まで、一寸三十分ばかり。」

おとなしい新らしい白、緑の中だから、そして外光の中だから大へんいいんだ。天竺木綿、その菓子のは置いて行ってもいい。雑嚢や何かもこの芝へおろしておいていい行かないものもあるだろうから。

「私はここで待ってますから。」校長だ。校長は肥ってまっ黒にいで立ちたしかにゆつくりみちばたの草、林の前に足を開いて投げ出している。

「はあ、では一寸行つて参ります。」木の青、木の青、空の雲は今日も甘酸っぱく、足な

みのゆれと光の波。足なみのゆれと光の波。

粘土のみちだ。乾いている。黄色だ。みち。粘土。

小松と林。林の明暗いろいろの緑。それに生徒はみんな新鮮だ。

そしてそうだ、向うの崖の黒いのはあれだ、明らかにあの黒曜石のdykeだ。こゝから

こんなにはつきり見えるとは思わなかつたぞ。

よしうまい。

「向うの崖をごろんなさい。黒くて少し浮き出した柱のような岩があるでしょう。あれは

水成岩の割れ目に押し込んで来た火山岩です。黒曜石です。」ダイクと云おうかな。い

いや 岩脈がいい。「ああいうのを岩脈といいます。」わかつたかな。

「わかりましたか。向うの崖に黒い岩が縦に突き出ているでしょう。」

あれは水成岩のなかにふき出した火成岩ですよ。岩脈ですよ。あれは。」

ゆれてるゆれてる。光の網。

「この山は流紋凝灰岩でできています。石英粗面岩の凝灰岩、大へん地味が悪い

のです。赤松とちいさな雑木しか生えていないでしょう。ところがそのへん、麓の緩い

傾斜のところには青い立派な闊葉樹が一杯生えていでしょう。あすこは古い沖

よかつた。それでもあの崖はほんとうの嫩い緑や、灰いろの芽や、樺の木の青やずいぶん立派だ。佐藤箴がとなりに並んで歩いてるな。桜羽場がまた凝灰岩を拾つたな。頬がまつ赤で髪も緒いその小さな子供。

雲がきれて陽が照るしもう雨は大丈夫だ。さつきも一遍云つたのだがもう一度あの禿の所の平べったい松を説明しようかな。平つたくて黒い。影も落ちてゐる。どこかであるなコロタイプを見た。及川やなんか知つてるんだ。よすかな。いいや。やろう。

「さあ、いいですか。あすこに大きな黄色の禿げがあるでしょう。あすこの割合上のあたりに松が一本生えてましよう。平つたくてまるで潰れた蕈のようです。どうしてあんなになつたんですか。土壌が浅くて少し根をのぼすとすぐ岩石でしょう。下へ延びようとしても出来ないでしょう。横に広がるだけでしよう。ところが根と枝は相関現象で似たような形になるんです。枝も根のように横にひろがります。桜の木なんか植えるとき根を束ねるようにしてまつすぐに下げて植えると土から上の方も箒のように立ちましよう。広げれば広がります。」

「そんだ。林学でおら習つた。」何と云つたかな。このせいの高い眼の大きな生徒。坂になつたな。ごろごろ石が落ちてゐる。

「先生この石何て云うのす。」 どうせきまつてる。

〔凝灰岩。 流 紋 凝灰岩だ。 凝灰岩の温泉の為に硅化を受けたのだ。〕
光が網になつてゆらゆらする。 みんなの足並。 小松の密林。

「釜淵だら俺あ前になんぼがえりも見だ。 それでも今日も来た。」

うしろで云つてゐる。 あの顔の赤い、そしていつでも少し眼が血走つてどうかすると泣いてゐるように見える、あの生徒だ。 五内川でもないし、何と云つたかな。

けれどもその語はよく分つてゐるぞ。 よくわかつてゐるとも。

巨礫がごろごろしている。 一つ欠いて見せるかな。 うまくいった。 パチンといった。

「これは安山岩です。 上流の方から流れてきたのです。」

すつと歩き出せ。 関さんだ。 「この石は安山岩であります。 上流から流れてきたのです。」

まねをしている。 堀田だな。 堀田は赤い毛糸のジャケツを着ているんだ。 物を言う口付きが覚束なくて眼はどこを見ているかはつきりしないで黒くてうるんでいる。 今はそれがうしろの横でちらつと光る。

その松林の中から黒い煙が一枚出てきます。

（ああ煙も入ります入ります。 遊園地には煙もちやんと入ります）なんて誰だつたかな、

云つていた、あてにならない。こんな畑を云うんだろう。おれのはもつとずつと上流の北き上川たかみから遠くの東の山地まで見はらせるようにあの小桜山こざくらの下の新らしくひら墾いた広い畑を云つたんだ。

「全体ぜんたいどごさ行くのだべ。」

「なあに先生せんせいさ従ついでさい行いげばいいんだじゃ。」また堀田ほりただな。前の通りだ。うしろで黄いろに光あっている。みんな躊躇ちゆうちよしてみちをあけた。おれが一番いちばんさきになる。こつちもみちはよく知らないがなあにすぐそこなんだ。路みちから見えたら下りるだけだ。防火線ぼうかせんもずうつとうしろになった。

「あれが小桜山こざくらだろう。」けわしい二つの稜りょうを持ち、暗くらくて雲かげにいる。少し名前に合あわない。けれどもどこかしんとして春はるの底そこの樺かばの木の気分きぶんはあるけれどもそれは偶然性ぐうぜんせいだ。よくわからない。みちが二つに岐わかれている。この下のみちがきつと釜淵かまぶちに行くんだ。もうきつと間違まちがいない。

小松こまつだ。密みつだ。混こんでいる。それから巨礫きよれきがごろごろしている。うすぐろくて安山岩あんざんがんだ。地質調査ちしつちようさをするときはこんなどこから来たかわからないあいまいな岩石がんしつに鉄槌かねづちを加くえてはいけないと教おしえようかな。すぐ眼めの前まへを及およ川かわが手て拭ぬぐを首くびに巻まいて黄色おうの服ふくで急いそ

でいるし、云おうかな。けれどもこれは必要がない。却って混雑するだけだ。とにかくひどく坂になった。こんな工合で丁度よく釜淵に下りるんだ。遠くで鳥も鳴いているし。下の方で溪がひどく鳴っている。ことによるとここらの下が釜淵だ。一寸のぞいてみよう。

黒い松の幹とかれくさ。みんなぞろぞろ従いてくる。溪が見える。水が見える。波や白い泡も見える。ああまだ下だ。ずうつと下だ。釜淵は。ふちの上の滝へ平らになって水がするする急いで行く。それさえずうつと下なのだ。

この崖は急でとても下りられない。下に降りよう。松林だ。みちらしく踏まれたところもある。下りて行こう。藪だ。日陰だ。山吹の青いえだや何かもじやもじやしている。さきに行くのは大内だ。大内は夏服の上に黄色な実習服を着て結びを腰にさげてずん藪をこいで行く。よくこいで行く。

急にけわしい段がある。木につかまれ木は光る。雑木は二本雑木が光る。

「じゃ木さば保ご附くこなしだじやい。」誰かがうしろで叫んでいる。どういう意味かな。木にとりつくくと弾ね返つてうしろのものを叩くというのだろうか。

光つて木がはねかえる。おれはそんなことをしたかな。いやそれはもうよく気をつけたん

だ。藪だ。もじやもじやしている。大内はよくあるく。

崖だ。滝はすぐそこだし、ここを下りるより仕方ない。さあ降りよう。大内はよく降りて行く。急だぞ。この木は少し太すぎる。灰いろだ。急だぞ、草、この木は細いぞ、青いぞあぶないぞ。なかなか急だ。大丈夫だ。この木は切つてあるぞ。「ほう、」そこはあんまり急だ。

おりるのか。仕方ない。木がめまぐるしいぞ。「一人落ちればみんな落ちるぞ。」誰かうしろで叫んでいる。落ちてきたら全くみんな落ちる。大内がずうつと落ちた。

河原まで行つてやつとまつた。

おれはとにかく首尾よく降りた。

少し下へさがり過ぎた。瀑まで行くみちはない。

凝灰岩が青じろく崖と波との間に四、五寸続いているけれどもとてもあすこは伝つて行けない。それよりはやつぱり水を渉つて向うへ行くんだ。向うの河原は可成広いし滝までずうつと続いている。

けれども脚はやつぱりぬれる。折角ぬらさないためにまわり道して上から来たのだ、飛

石を一つこさえてやるかな。二つはそのまま使えるしもう四つだけころがせばいい、ま
ずおれは靴をぬごう。ゴム靴によれた青の靴下か。「一寸待って、今渡るようにしま
すから。」

この石は動かせるかな。流紋岩だかなりの比重だ。動くだろう。水の中だし、アル
キメデス、水の中だし、動く動く。うまくいった。波、これも大丈夫だ。大丈夫。引
率の教師が飛石をつくるのもおかしいがまたえらい。やっぱりおかしい。ありがたい。
うまくいった。

ひとりが渡る。ぐらぐらする。あぶなく渡る、二人がわたる。

もう一つはどれにするかな。もう四人だけ渡っている。飛石の上に両あしを揃えてきちん
と立って四人つづいて待っているのは面白。向うの河原のを動かそう。影のある石だ。
持てるかな。持てる。けれども一番波の強いところだ。恐らく少し小さいぞ。小さい。
波が昆布だ、越して行く。もう一つ持って来よう。こいつは苔でぬるぬるしている。これ
で二つだ。まだぐらぐらだ。も一つ要る。小さいけれども台にはなる。大丈夫だ。おれは
はだして行こうかな。いいややつぱり靴ははこう。面倒くさい靴下はポケットへ押し込
め、ポケットがふくれて気持ちがいいぞ。

素あしにゴム靴でびちやびちや水をわたる。これはよつぽどいいことになっている。前にも一ぺんどこかでこんなことがあった。去年の秋だ。腐植質の野原のたまり水だったかもしれない。向うに黒いみちがある。崖の茂みにはいつて行く。これが羽山を越えて台に出るのかもわからない。帰りに登るとしようかな。いいや。だめだ。曖昧だしそれにみんなも越えれまい。

「先生、この石何す。」一かけひろって持っている。「ふん。何だと思えます。」「何だべな。」「凝灰岩です。ここらはみんなそうですよ。浮岩質の凝灰岩。」

みんなさつきはあしをぬらすまいとしたんだが日が照るし水はきれいだし自分でも気がつかず川にはいったんだ。

もうずんずん瀑をのぼって行く。cascadeだ。こんな広い平らな明るい瀑はありがたい。上へ行ったらもつと平らで明るいだろう。けれども壱穴の標本を見せるつもりだったが思っただくらいはつきりはしていないな。多少失望だ。岩は何という円くなめらかに削られたもんだろう。水苔も生えている。滑るだろうか。滑らない。ゴムの底のざりざりの摩擦がはつきり知れる。滑らない。大丈夫だ。さらさら水が落ちてくる。靴はビチャビチャ云っている。みんないい。それにみんなは後からついて来る。

苔がきれいにはえている。実に円く柔らかかに水がこの瀑のところを削ったもんだ。この浸蝕の柔らかさ。

もう平らだ。そうだ。いつかもここを溯って行つた。いや、此処じゃない。けれどもずいぶんよく似ているぞ。川の広さも両岸の崖、ところどころの洲の青草。もう平らだ。みんな大分溯つたな。

「ここをごらんさい。岩石の裂け目に沿って赤く色が變つていよう。裂け目のなところにも赤い条の通つているところがあるでしょう。この裂け目を温泉が通つたのです。温泉の作用で岩が赤くなつたのです。ここがずうつとつちの底だつたときですよ。

わかりますか。」
だまつている。波がうごき波が足をたたく。日光が降る。この水を渉ることの快さ。菅木がいるな。いつものようにじつとひとの目を見つめている。

「ここをごらんさい。岩に裂け目があるでしょう。ここを温泉が通つて岩を變質させたのです。風化のためにもこう云う赤い縞はできます。けれどもここではほかのことから温泉の作用ということがわかるのです。」

ずいぶん上流まで行つた。實際こんな川床が平らで水もきれいだし山の中の第一流の道路だ。どこまでものぼりたいのはあたりまえだ。

向うの岸の方に向つろ。

「先生この岩何す。」千葉だな。お父さんによく似ている。「何に似てます。何でできますか。」だまつている。「わかりませんか。礫岩です。礫岩です。凝灰質礫岩。」及川だな。「いいですか。これは温泉の作用ですよ。この裂け目を通つた温泉のために凝灰岩が変質を受けたんです。」

みんなわかるんだな。これは。向うにも一つ滝があるらしい。うすぐろい岩の。みんなそこまで行こうと云うのか。草原があつて春木も積んである。ずいぶん溯つたぞ。ここは小さな段だ。

「ああ云う岩のすき間のごと何て云うのただたな。習つたたんとも。」

「やつぱり裂け目です。裂け目でいいんです。」習つたというのは節理だな。節理なら多面節理、これを節理と云うわけにはいかない。裂罅だ。やつぱり裂け目でいいんだ。壺穴のいいのがなくて困るな。少し細長いけれどもこれで説明しようか。elongated-pot-holes (こ)がどうしてこう掘れるかわかりますか。石ころ、礫がこれを掘るのです。そら水

のために礫がごろごろするでしょう。だんだん岩を掘るでしょう。深いところが一層深くなるはずです。もつと大きなものもあります。」

日光の波、日光の波、光の網と、水の網。

「ほこの穴こまん円けじや。先生。」

ああいい、これはいい標本だ。こいつなら持つてこいだ。

「さあ、見て下さい。これはいい標本です。そら。この中に石ころが入ってましよう。みんな円くなつてるでしょう。水ががりがり擦つたんです。そら。」

実にいい礫だ。まっ白だ。まん円だ水でぬれている。取つてしまった。誰かがまた掻き廻す。もうない。あとは茶色だし少し角もある。ああいいな。こんなありがたい。あんまり湧る。もう帰ろう。校長もあの路の岐れ目で待つている。

「ほう。戻れ。ほう。」向うの崖は明るいし声はよく出ない。聞えないようだ。市野川やぐんぐんのぼつて行く。「ほう、」「戻れど。お。」「戻れ。」

向いた向いた。一人向けばもういい。川を戻るよりはここからさっきの道へのぼつたほうがいい、傾斜もゆるく丁度のぼれそうだ。「みんなそこからあの道へ出る。」手を振つたほうがわかるな。わかつたわかつたわかつたようだ。市野川が崖の上のみちを

見ている。

うしろの滝たきの上で誰だれか叫さけんでいる。大竹おおたけだ。「おら荷物にもつ置いてきたがらこつちがら行く

。」「よかろう。「よおし。」もう大竹が滝をおりて行く。すばやいやつだ。二、三人またついて行く。それからも一人おくれてひどく心配しんぱいそうに背中せなかをかがめて下りていく。齊さい藤いとう貞てい一いちかな。一寸ちよつとこつちを見たところには栗鼠りすの軽かるさもある。ほんとうに心配しんぱいなんだ。かあいそう。

市野川やみんながぞろぞろ崖をみちの方へ上つて行くらしい。

そうすればおれはやつぱり川を下つたほうがいいんだ。もしも誰か途とちゆう中で止つていてはわるい。尤もつとも靴くつした下もポケットに入つてゐるし必ずかなら下らなければならぬということはない、けれどもやつぱりこつちを行こう。ああいい気持きもちだ。鉄かね槌づちをこんなに大きく振つて川をあるくことはもう何年ぶりだろう。波なみが足をあらいい水はつめたく陽ひは射さしている。

「先生あ、ずいぶん足あ早いな。」富手とみてかな、菅木すがきかな、あんなことを云いっている。足が早いというのは道みちをあるくときの話だ。ここも平たいらで上じやう等とうの歩道ほどうなのだ。ただ水があるばかり。

「先生、あの崖がけのどご色かわ変かつてるのあ何なにしてす。」簡かんだ。崖の色か。

「あれは向うだけは土が落ちたんです。滑つて。」

うん。あるある。これが裂罅を温泉の通つた証拠だ。玻璃蛋白石の脈だ。

「ここをござんなさい。岩のさけ目に白いものがつまっているでしょう。これは温泉から沈澱したのです。石英です。岩のさけ目を白いものが埋めているでしょう。いい標本です。」みんなが囲む。水の中だ。

「取らえないがべが。」「いいや、此処このまんまの標本だ。」

「それでも取らえないがべが。」「取つてみますか。取れます。」

中々面倒だ。

「先生こつちにもつと大きなのあるんす。」あるある。これならネストと云つてもいい。

これなら取れる。ハムマアの尖つた方ではだめだ。平たい方は……。

水がびちやびちやはねる。そつちの方のものが逃げる、ふん。

「水がはねますか。やつぱりこつちでやるかな。」

白く岩に傷がついた。一一所ついた。

とれる。とれた。うまい。新鮮だ。青白い。

緑簾石もついている。そうじゃないこれは苔だ。いいですか。これは玻璃蛋白石で

す。温泉から沈澱したのです。晶洞しょうどうもあります。小さな石英の結晶けつしょうです。持つて

おいでなさい。」

誰だ崖だれがけの上で叫んでいるのは。

「先生。おら河童捕りしたもや。河童捕り。」ふじわらけんたろう藤原健太郎だ。黒の制服せいふくを着て雑囊ざつぼうをさげ、ひどくはしやいで笑わらっている。どうしていまごろあんな崖の上などに顔を出したのだ。

「先生。下りで行くべがな。先生。よし、下りで行くぞ。」

「うん。大丈夫だいじょうぶ。大丈夫だ。」おりるおりる。がりがりやって来るんだな。ただそのおしまいの一足だけがあぶないぞ。裸はだかの青い岩だし急きゆうだ。

「おおい。もう少し斜ななめにおりろ。」おりるおりる。どんどん下りる。もう水へ入った。

「どうしたのです。」「先生。河童捕りあんすた。ガバンも何も、すっかりぬらすたも。」

「どこで。……」

もう下ろう。滝たきに来た。下りているものもある。水の流ながれる所は苔ところこけは青く流れない所は褐か色っしょくだ。みんなこわごわ下りて来る。水の流れる所は大丈夫すべ滑らないんだ。「水の流れるところをあるきなさい。水の流れるところがいいんです。」

あれは葛丸川だ。足をさらわれて淵に入ったのは。いいや葛丸川じゃない。空想のときの暗い谷だ。どっちでもいい。水がさあさあ云っている。「いいな。あそこの水の跳ね返る処よ。」

うん、いい早池峯山の七折の滝だ。こんなもの大きただけだろう。

もうみんなおりる。おれもおりる。たった一人あとからやって来る人がある。こわそうだ。

「水の流れるところをあるくんです。水の流れる所を歩くんですよ。」

そうだ。そうだ。いい気持ちだ。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

台川

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>